

〈研究ノート〉

* ヤングアダルトのための参考図書について

中学生の学齢を中心として

三 澤 勝 己

はじめに

ヤングアダルトという言葉がアメリカから導入され、四半世紀余りが経過している。今日では図書館界のみならず、広く認知されている用語である。『広辞苑』『大辞林』などにも立項されていることは、その一証であるといえよう。しかし、その対象となる年齢になると、見解の相違が見受けられる。『広辞苑』『大辞林』は十代後半の若者で、二十代前半をも含めるといふ見解を示している。⁽¹⁾これに対して図書館界では、その年齢をやや引き下げて、十代前半から後半、即ち中学生・高校生の学齢に相当する年代と見る考え方が多いように思われる。例えば、堀川照代氏編『児童サービス論』所収の「ヤングアダルトサービスの概要」(半田雄二氏執筆)では、「日本では公式の規定はないものの、『公立図書館におけるヤングアダルト(青少年)サービス実態報告』(日本図書館協会)によれば、十三歳から十八歳(中学生と高校生にあたる学齢)とみなしている図書館がもっとも多い」と説明している。⁽²⁾このように対象年齢への見解の相違が見られるが、ここでは十代前半から後半の中学生・高校生の学齢をヤングアダルトと考えることとしたい。

さて、ヤングアダルトが読む図書を考えてみると、児童書・成人向け一般書、それと読者対象をヤングアダルトに特定した図書、これら三種類が挙げられるのではあるまいか。その出版点数を『出版年鑑』で見ると、児童書は成人向け一般書のおよそ5%である。⁽³⁾『出版年鑑』は、成人向け一般書の外に、児童書と学習参考書という区分を立て、ヤングアダルトに特定した図書の項目は設けられていない。ヤングアダルトに特定した図書は、『出版年鑑』では児童書に包含されているから、それらは児童書よりもさらに出版点数が少ないことになる。その中でも、分野としては小説が多いというのが現況になる。⁽⁴⁾

そのような状況において、調べ学習の広がりが見られる割に、ヤングアダルトが何かを調べる時、読み方、ことがら、資料などを知るために用いる図書、すなわち辞典・事典・書誌・目録などを中核とした参考図書そのものは、出版点数が少ないといわざるを得ないであろう。高校生であれば成人向け一般書の利用で補充できるが、中学生となると成人向け一般書の利用には制約がある。そうであれば、ヤングアダルトの前半に当る中学生には、どのような参考図書が有効なのかを検討することは、極めて重要な問題であると思う。この点を、本稿では些か考察してみたいと考える次第である。

一 ヤングアダルトと公共図書館

公共図書館では、ヤングアダルトをどのように捉え、また、どのようなサービスが実施されているといえるだろうか。その様相を、一九八二・一九九二・二〇〇二年と、十年毎に過去三回実施されている日本図書館協会による公共図書館への全国調査で見てみよう。^⑤設問の中に、ヤングアダルトの年齢を問う項目がある。一九八二年調査では、三三五館の内、十二〜十八歳と回答したのが一六〇館（四八％）、中学生と回答したのが一一四館（三四％）の順で、この二つで八割を超えていた。一九九二年調査になると、回答が多岐に分かれ、四六〇館の内、十二〜十八歳が一六七館（三八・五％）、十から十八歳が一〇九館（二三・九％）、十二〜二十歳が六十一館（一三・三％）の順であった。二〇〇二年は、一〇三一館中、十二〜十八歳が四四〇館（四二・七％）、十〜十八歳が二五六館（二四・八％）で、後は一〇％以下となり、十〜二十歳（九・六％）、十二〜二十歳（八・八％）の順となっている。ここから、冒頭で触れた年齢については、中高校生の年齢を考える館の多いことが窺える。また、ヤングアダルト・コーナーの有無については、一九九二年調査で「ある」が九五館（二二・二％）だったのが、二〇〇二年は、六八三館（六六・二％）で「ある」と回答している。^⑥さらに、二〇〇二年調査のヤングアダルト向け図書の有無という設問には、実に九七・九％に上る図書館が「ある」と回答している。^⑦これは、ヤングアダルトサービスに対する関心の高まりと共に、サービスを実施する図書館が大幅に増加していることを示しているといえよう。しかし、その一方で、ヤングアダルトサービスの専任担当者は、

二〇〇二年調査で僅かに一〇館（一・八％）にしか過ぎず、ヤングアダルト向け資料費も同年調査で「ある」と回答したのは、一三五館（一三・一％）であって、ヤングアダルトサービスへの関心の高まりに比して、内実はまだ伴っていない面のあることを窺わせている結果ではないだろうか。また、ヤングアダルトサービスについて知りたいことという設問では（複数回答可）、「ヤングアダルト向け資料の種類とその選書方法」が、一九九二年は三五四件、二〇〇二年が六五〇件と最も多く、選書に対する戸惑いを垣間見せている。

同調査にはヤングアダルトサービスの位置づけに対する設問もあり、「児童と成人の中間にあるサービス」とする回答が、一九九二年は三九七館（八六・三％）、二〇〇二年では七七〇館（七四・七％）と、共に突出している。このような「児童と成人の中間」という位置付けは、収書選択基準などで、どこに焦点を当てればよいのかという難しさとも結び付くことといえよう。この点について、半田雄二氏が「従来の公共図書館には〈児童書の選択基準〉と〈一般書の選択基準〉はあっても、〈ヤングアダルトのための選択基準〉という視点が欠けていた」と指摘された点は、今でも該当する課題であると思われる。

二 ヤングアダルトと学校図書館

今述べた日本図書館協会による公共図書館への全国調査からも窺えるように、ヤングアダルトを十歳からとする見方も僅少ではない。十歳からとなると小学校高学年も包含されるので、ヤングアダルトサービスは小学生・中学生・高校生の年齢全てに関連があることになる。従って、ヤングアダルトサービスは、公共図書館の問題のみ

ならず、学校図書館にとっても密接な問題である。しかしながら、ヤングアダルトサービスは、これまで公共図書館の側からの研究が専らではなかっただろうか。「同じヤングアダルト世代に係わっている他職種の専門家と連携を深める。」：まず学校図書館と学校そのものの動きに注目すべきである。かつては公共図書館の側が一方的にサービスするだけで、それもこちらがいろいろ手を差し延べても逆に迷惑がられるようなこともあったかもしれない。だが活発な学校図書館ではいまやヤングアダルトサービスに関して一歩も二歩も進んでいるところもある」とする指摘のような状況ではなかったであろうか。ここにも示されているように、学校図書館は状況が大きく変わり活動が活発になっているが、一方、ヤングアダルト向けの図書に関する調査研究を学校図書館の側から行ったものはまだまだ少ないのではなからうか。このような調査研究は、学校図書館でも進められる必要がある。

今日ほど学校図書館が注目されている時代は、かつてなかったであろう。十二学級以上の学校への司書教諭の必置、現行の学習指導要領における総合的な学習の時間の設置など、その要因は様々であろう。総合的な学習の時間に関して「中学校学習指導要領」から引用すると、「第一章 総則」「第四 総合的な学習の取扱い」六（四）に「学校図書館の活用、他の学校との連携、公民館、図書館、博物館等の社会教育施設や社会教育関係団体等の各種団体との連携、地域の教材や学習環境の積極的な活用などについて工夫すること」¹⁵⁾、「第六 指導計画の作成等に当たって配慮すべき事項」二（十）に「学校図書館を計画的に利用しその機能の活用を図り、生徒の主体的、意欲的な学習活動や読書活動を充実すること」と、学校図書館の活用が求められている。同様に、各教科や特別活動についても学

校図書館に関する記述が散見される。「第二章 各教科」「第六節 美術」「第三 指導計画の作成と内容の取扱い」四に「学校図書館等における鑑賞用図書、映像資料などの活用を図るものとする」という記述のあることなどが、その一例である。そのあたりを、『図書館年鑑二〇〇六』所収「学校図書館」でも、「近年、学校図書館は、学習指導要領の中で多様な活用方法が取り上げられ、また教科ごとに記述が変化するなどにより、さまざまな形態で活用される時間が増えている」と「概況」で触れている¹⁶⁾。しかし、「概況」では、学校図書館の利用の増加や認識の高まりが指摘されている一方で、「学校図書館の資料の不足や整備の実態は予算的にも職員体制についても改善される状況にはなく、教職員個々の工夫や公共図書館の協力・支援などによって進められているのが現状である」と問題点が指摘されている。教職員が個々にではなく相互の協力によって、さらには公共図書館との連携によって、学校図書館に備えるための資料の研究や資料の充実を進めることは、今後の大きな課題であるといえよう。その意味において、司書教諭が中心となつて教職員全体がヤングアダルト向け資料を研究することが、益々要請されているのではないだろうか。

三 ヤングアダルト向け図書の出版

ヤングアダルトを対象とした図書については、出版社からの意見や提言がある。現在二十三社が参加するヤングアダルト出版会の活動について、下向実氏が「ヤングアダルト図書の普及をめざして」で紹介している。『書店に棚がないからつくらない、つくらないから棚がない』という悪循環がそこにはあり、児童書と一般書の橋渡

しをすべき優れたYA図書の出版は極めて難しく、中・高校生たちはいきなり活字が小さく文章表現の高度な本と取り組むことになってしまった」と、二十七年前の出版会発足時の状況が説明されている。それから十年後の状況を同じ出版会の中村勝哉氏が、「ヤングアダルト図書と書店」で述べている。⁽¹⁶⁾そこでは上記の悪循環が変わらないことと共に、「YA世代の中でも、高校生はある程度大人の本を読みこなせるからまだいいのですが、中学生はかわいそうな状態に置かれています。非常に高い好奇心とまだ低い読書力とのギャップを抱え、YA図書が一番必要な年代であるにもかかわらず、中学生向けのYA図書が特に少ないからです」という問題点が指摘されている。

一方、公共図書館の側からは、半田雄二氏が前掲の「ヤングアダルトのための選択基準」という視点が欠けていた」と指摘すると共に、「中学生の図書館はなれといういい方は、あまり正確ではなさそうである。より正確に言えば、それは児童書ばなれ、あるいは児童室ばなれなのである。しかも、それが一般書の利用にスムーズに転換されていないことが問題なのである」「青年の一般書への移行がスムーズに行われないのは、一般書の中に、彼の興味や能力に見あった適切な資料が少ないか、あるいは、資料はあってもそれを見つけ出すことができないからであろう」と、中学生の読書資料の現状を説明した。⁽¹⁷⁾ヤングアダルト世代、ことに中学生における図書選択の大切さが理解できよう。

下向実氏が前掲「ヤングアダルト図書の普及をめざして」で、ヤングアダルト向け図書の書評が新聞五紙で掲載されていることを報告しているように、ヤングアダルト向け図書の出版状況には変化が見られるであろうが、今の状況はどうなのであるうか。

表1 最近10年間における新刊書籍部門別出版点数

	0 総記	1 哲学	2 歴史	3 社会科学	4 自然科学	5 技術	
1996	2,733	2,794	3,824	12,607	4,533	5,479	
1997	2,972	2,821	4,522	12,803	4,783	5,481	
1998	2,720	2,840	4,250	13,586	4,721	5,610	
1999	2,751	2,816	4,444	13,413	4,935	5,727	
2000	2,587	2,997	4,634	14,099	5,218	6,105	
2001	2,546	2,967	5,148	14,648	5,385	7,709	
2002	3,005	3,138	5,001	15,238	5,758	7,868	
2003	2,849	3,280	5,141	15,744	6,012	8,254	
2004	2,882	3,763	5,070	16,002	6,273	8,064	
2005	2,551	3,763	5,102	16,201	6,226	8,104	
	6 産業	7 芸術	8 言語	9 文学	児童書	学習参考書	総計
1996	2,422	8,358	1,405	11,680	3,460	1,167	60,462
1997	2,532	8,287	1,516	11,715	3,455	1,449	62,336
1998	2,639	8,799	1,618	11,648	3,276	1,316	63,023
1999	2,732	8,767	1,625	11,191	3,074	1,146	62,621
2000	3,000	8,895	1,766	11,484	3,334	946	65,065
2001	3,068	10,199	1,967	12,119	3,940	877	71,073
2002	3,181	10,351	2,030	12,708	4,265	1,716	74,259
2003	3,357	10,477	1,933	12,738	4,369	1,376	75,530
2004	3,332	10,531	2,023	13,355	4,650	1,114	77,031
2005	3,337	10,884	2,063	13,595	5,064	1,414	78,304

(『出版年鑑 2006』統計・資料編に拠る)

「表一」は、『出版年鑑』から最近十年間における新刊書籍の部門別出版点数を掲出したものである。¹⁸⁾ ここにおける児童書には、前述のように中高校生を対象とする書籍も含まれているが、一九九六年には成人向け一般書の歴史部門に近似していた数であり、横ばいで推移していたものが、二〇〇一年から増加に転じ、二〇〇五年には五千点の万台を越えて、年々増加していた歴史部門に再び近似する数字を示している。児童書全体としては、出版点数が大幅に増加している様子が窺える。『出版年鑑』では児童書もまたNDCの区分に準拠して分類されているので、調べ学習に使用する領域という観点から、総記の部門と事例として一つの分野からは社会科学に着目してみることとする。

『出版年鑑』の児童書には読者対象が記されているので、それを基にして、最近五年間で作成したものが「表二」である。¹⁹⁾ これを見ると、総記も社会科学も年によって変動はあるものの総数には際立った特徴は見られないこと、児童書全体の中ではこの二つの部門の図書出版は多くないことが窺えるのではないだろうか。読者対象では「表二」の「中」「中高」がヤングアダルトに特定した図書と見なすことができるかと思うが、「中」について書名を掲出してみることとする。

二〇〇一年

総記

佐藤亜紀他『中学生の教科書』（四谷ラウンド）、このみ・ブ
ラング編『なぞなぞ大行進』（小学館）

社会科学

菅原真理子監修『将来の夢さがし！ 職業ガイド二三四種』
（集英社）、坂本辰男監修、こどもくらぶ編『中学生のための

表2 最近5年間における児童書の総記と社会科学

	2001	2002	2003	2004	2005
総記					
小中	12	13	6	5	11
中	2	0	2	0	2
中高	2	2	3	4	5
その他	50	28	28	37	38
総数	66	43	39	46	56
社会科学					
小中	23	22	39	51	24
中	3	4	8	1	3
中高	10	9	16	11	22
その他	94	148	72	74	127
総数	130	183	135	137	176

（『出版年鑑』 2002～2006の目録・索引編に拠る）

「総合」アイデアBOOK』(全六冊、ポプラ社)、ぬくみち
ほ『ナバホの大地へ』(理論社)

二〇〇二年

社会科学

学研編『将来の仕事なり方完全ガイド』一・二、中山治『中学生のための「個性(タイプ)別」超勉強法』(洋泉社)、鈴木邦成『内申書UPのプログラム』(ブックメイツ)

二〇〇三年

総記

日本子どもの本研究会編『どの本よもうかな? 日本編』、同上『どの本よもうかな? 海外編』(ともに金の星社)

社会科学

吉田俊弘・斉藤規『新しい国をつくる』(中学生ライブラリー一、安部直文『よくわかる世界の紛争大図解』(汐文社)一、三、森茂監修『職場体験学習』にすぐ役立つ本』(全十六冊、学研)、北村邦夫監修『いつからオトナ? ころろ&からだ』(集英社)、武田利幸『子どものための頭がよくなる読み葉』(よみがえる子どもたちハンドブック版その二、日教、『世界の中学生』(全八冊、学研)

二〇〇四年

社会科学

浅羽春二『平和をつくる』(中学生ライブラリー二、旬報社) 二〇〇五年

総記

こどもくらぶ編『調べ学習NAVI日本のミュージアム』(同友館)、同上『調べ学習NAVI東京のミュージアム』

社会科学

坂井利三郎『なりたいたい自分になるためのどんとこい! 中学生の進路適性ワーク』(旺文社)、早乙女智子『十三歳からの「恋とからだ」ノート』(新講社)、神戸大学発達科学部附属住吉中学校『How to study』(明治図書出版)

これらの書目からは、調べ学習やその一環としての進路選択の学習など、最近の動向を窺うこともできる。しかし、何といっても、これらの領域では中学生を対象とした図書は、今でも少ないということを見ることが出来る結果ではないだろうか。

中学生と高校生の双方を対象とする図書に、目を転じてみよう。こちらは、少し点数が増えてきているようである。二〇〇五年のものを列挙してみる。

二〇〇五年

総記

岩波書店編集部『いま、この研究がもしろい』(岩波ジュニア新書)、杉山知之編『デジタルの仕事がしたい』(岩波ジュニア新書)、朝の読書推進協議会編『本はこころのともだち』(メディアパル)、金原瑞人監修『金原瑞人「監修」による十二歳からの読書案内』(すばる舎)、吉村昭『事物はじまりの物語』(ちくまプリマー新書)

社会科学

岸谷美穂『イラクの戦場で学んだこと』(岩波ジュニア新書)、藤田千枝編『国境をこえて』(大月書店)、「記憶と表現」研究会『訪ねてみよう戦争を学ぶミュージアム/メモリアル』(岩波ジュニア新書)、大村敦志『父と娘の法入門』(岩波ジュニア新書)、野田和寿・星野茂監修『十四歳の法律相談所』

(ロースクール)』(新風舎)、池上彰『憲法はむずかしい』(ちくまプリマー新書)、北尾トロ『気分はもう、裁判長』(理論社)、新井明・柳川範之『経済の考え方がわかる本』(岩波ジュニア新書)、邱永漢『お金持ちになれる人』(ちくまプリマー新書)、松本啓子・かなしろにゃんこ『大人も知らない「本当の友だち」のつくり方』(講談社)、坂口美佳子・藤田千枝編『文化の世界地図』(大月書店)、玄田有史『十四歳からの仕事道』(理論社)、ジェイアクト『まなぶっく 知りたい職業やりたい仕事かわかる本』(メイツ出版)、赤松良子監修『新版 女性の権利』(岩波ジュニア新書)、河野美香『学校で教えない性教育の本』(ちくまプリマー新書)、アンドレアパロット、富永星訳『デートレップってなに?』(大月書店)、深見埴『こどものためのドラッグ大全』(理論社)、光野有次『みんなでつくるバリアフリー』(岩波ジュニア新書)、スベンドリニ・カクチ、大倉弥生訳『あなたにもできる災害ボランティア—津波被害の現場から—』(岩波ジュニア新書)、内田樹『先生はえらい』(ちくまプリマー新書)、貴戸理恵・常野雄次郎『不登校、選んだわけじゃないんだぜ!』(理論社)、香山リカ『へいい子』(じゃなきやいけないの?)』(ちくまプリマー新書)

「表二」を見ても少し増加しており、こちらは事情がやや好転してきているといえようか。何れにしても、ヤングアダルト向け図書が徐々に増えてきているとはいえず、「表二」が示すように、総記や社会科学の部門は、小学生向け図書が大勢を占めている。中学生が調べ学習を行う際に、そのための図書が豊富に出回っているという状況には到っていないのが現状であるといわざるを得ないだろう。

四 中学生向けの参考図書

それでは、中学生が調べ学習などを行う際に相応しい参考図書には、具体的にどのようなものがあるのだろうか。この問題を考える前提として、二つの点について触れておきたい。第一点は、前述のように、中学生を読者に特定した参考図書は極めて少ないであろうことである。かといって、成人向け参考図書を教職員が指導することなしにいきなり利用することには、まだ無理があろう。そこで、小学生と中学生、中学生と高校生、のそれぞれ双方を読者対象とした図書を範囲に広げて考える必要がある。第二点は、周知のように参考図書といえは書誌・目録・辞典・事典などを指すが、純然たる参考図書に限定すると点数の少ないこと、また分類の問題とも関連してNDCの区分で括ることのできない複合領域が考えられることである。例えばノンフィクションと呼ばれるような分野にも探索を拡大する必要があると思われる。

まず、教職員の側が中学生に利用できる参考図書を知るための、いわば書誌の書誌ともいふべきものが挙げられよう。それらは、司書教諭養成課程の「学習指導と学校図書館」「読書と豊かな人間性」司書養成課程の「児童サービス論」などのテキスト類にも紹介されている。しかし、これらのテキスト類は編集・刊行に時間がかかるので、最新の動向を盛り込みにくいという面がある。従って、他のものを利用して補う必要があるだろう。

以下のものが、よく利用されるのではないだろうか。

『選定図書総目録』(日本図書館協会、一九五〇年、年刊)、
『学校図書館基本図書目録』(全国学校図書館協議会、一九五

二年、年刊）、『ヤングアダルト図書総目録』（ヤングアダルト図書総目録刊行会、一九八二年、年刊）、『ノンフィクション子どもの本九〇〇冊』（一声社、一九八七年）、『私たちの選んだ子どもの本 改訂版』（東京子ども図書館、一九九一年）、『YA読書案内』（晶文社、一九九三年）、『図書館でそろえたい子どもの本』（日本図書館協会、一九九七年）、『子どもにすすめたいノンフィクション 一九八七～一九九六』（一声社、一九九八年）、『調査研究・参考図書目録』本編（図書館流通センター、二〇〇二年）、『子どもの本のリスト』（東京子ども図書館、二〇〇四年）、『何をどう読ませるか』第四群（全国学校図書館協議会）、『児童図書総目録 中学校用』（日本児童図書出版協会、年刊）

これらの目録類を補うものとして、『学校図書館速報版』掲載の「全国学校図書館協議会選定図書」が挙げられる。最新の「第一三一回選定図書」から摘録してみる⁽²⁾。

（歴史）谷口研語監修『諸国の合戦争乱地図―古地図と年表でみる壬申の乱から西南戦争まで 諸国動乱一二〇〇年の歴史の舞台―』東日本編（人文社）同上『諸国の合戦争乱地図』西日本編、新創社編『京都時代MAP―安土桃山編―』（光村推古書院）、三省堂編修所編『最新全国市町村名事典』（三省堂）、『地図で知る平成大合併』（平凡社）（社会科学）リチャード・プラット、川成洋訳『スパイ事典』（あすなる書房）（技術）中島恵子・藤平英一共編『食とクッキング英語小事典―重要語句・基本英会話・食ミニ情報―』（第二版、英光社）

これらは、中学生と高校生の双方を読書対象として、また参考図

書と類推できる図書に絞って抽出したものである。さらに、ノンフィクション類に広げれば、別な書目が加えられる。

中学生では、参考図書として次の書目が紹介されることが多い。

『増補改訂の本で調べるか 中学校版』（全八冊、リブリオ出版）、『学習百科大事典』（小学館）『現代用語の基礎知識学習版』（自由国民社）『朝日学習年鑑』（朝日新聞社）『総合百科事典ポプラディア』（ポプラ社）

これらに加えて、前述のような『学校図書館速報版』による最新の動向、あるいは、岩波ジュニア新書・福音館文庫・ちくまプリマーブックスなどを丹念に見る必要があるだろう。それによって、ヤングアダルトの入り口に当る中学生が利用可能な参考図書類は、豊富であるとはいえずとも、少しでも欠を補うことができるのではないだろうか。

おわりに

ヤングアダルト、特に中学生の世代には、どのような参考図書があるのか、という問題は、管見の限りではほとんど検討されていない問題である。そのような現状を踏まえて、この小稿では些かの考察と提言を試みた。

これまで述べてきたことを簡略にまとめると、以下の通りである。ヤングアダルト向けの図書は、その出版点数自体が少ない。加えて、小説などの出版に偏り、辞典・事典・書誌・目録などの参考図書はあまり刊行されない。そのような現状認識を行い、ヤングアダルトの前半世代に当る中学生における参考図書を検討した。中学生には、その学齢から考えて成人向けの参考図書を閲覧することには無理が

あろう。ところが、中学生に読者対象を特定した参考図書は実には少ない。従って、小学生と中学生、あるいは中学生と高校生、の双方を読者対象とするもの、さらには、辞典・事典などの一般に考えられる参考図書の区分から範囲を拡大して、ノンフィクションの領域にも探索を広げる必要のあることを提言した。次に、実際にはどのようなものが刊行されているのかを検討するために、『選定図書総目録』『学校図書館基本図書目録』のように、よく利用される図書のみならず、探索の範囲を広げる必要のあることを指摘した。ここでは『学校図書館速報版』を事例として、そこに見えるような情報を丹念に収集すれば、中学生に活用が期待される参考図書として、不足の欠を補えるものが出てくることを述べた。

このような情報収集が、学校であれば、司書教諭を中核とする教職員に何よりも求められているのではないだろうか。

拙稿を結ぶにあたり、山岡寛人氏の提言を掲出しよう。⁽²⁾

おわりに、出版社に対する希望というか夢を述べたい。それは、複数の出版社の共同企画で中学生、高校生のための百科全書をつくらうという提案である。

いくつかの出版社が中学生、高校生向けのノンフィクションのシリーズに取り組んでいる。しかし、多彩な分野をカバーできている。また、刊行も不定期で、場合によっては途中でシリーズが消滅してしまう。ノンフィクションは地味な出版物だからたくさん販売できるとは限らない。また、出版社によって得手、不得手の分野があるのも当然のことだ。共同企画で進めれば解決できることは多いのではないか。

まさに山岡氏のいわれるような現状であり、提言されている共同企画による中学生・高校生向けの百科全書が待たれる。

注

- (1) 『広辞苑』第五版(岩波書店、一九九八年)は「十代後半の若者。また、成人期初期の人」、『大辞林』第二版新装版(三省堂、一九九九年)は「十代後半の若者。ときに、二十代前半も含める」と、ほぼ同様の説明をしている。
- (2) JLA図書館情報学テキストシリーズ十一、日本図書館協会、一九九八年。
- (3) 出版ニュース社、年刊。『出版年鑑』は、後で取り上げることとする。
- (4) 玉川博章氏「現代における青少年向け書籍の発展—ヤングアダルト文庫出版史—」、『出版研究』三十五、二〇〇五年三月)では、コバルト文庫などのヤングアダルト向け文庫の出版が考察されている。また、「トレンド館」(読売新聞(東京)、二〇〇六—八—九夕刊五面)では、ヤングアダルト小説の活況が紹介されている。
- (5) 『公立図書館におけるヤングアダルトサービス実態調査報告』(大阪市立大学学術情報総合センター図書館情報学部門・日本図書館協会、二〇〇三年)。
- (6) 回答を得た一三二七館の中で、ヤングアダルトサービスを実施していると回答した館の数。
- (7) 有効回答を得た一七九二館の中で、ヤングアダルトサービスを実施していると回答した館の数。
- (8) 有効回答を得た二五三〇館の中で、ヤングアダルトサービスを実施していると回答した館の数。

- (9) 一九八二年の調査は簡略なもので、この質問項目がない。
- (10) 一九八二年と一九九二年の調査には、この質問項目がない。また、この調査報告書では、ヤングアダルト向け図書の見解は施されていない。
- (11) 注(2) 前掲書所収「ヤングアダルト資料の特色」。
- (12) 半田雄二氏「ヤングアダルトサービスの概況とプログラム(行事)の現状―アメリカと日本との内容比較―」(論集・図書館情報学研究の歩み十七『児童・ヤングアダルトサービスの到達点と今後の課題』所収、日外アソシエーツ、一九九七年)。
- (13) 周知のように、二〇〇三年十二月の改正によって、この「学校図書館の活用」などの文言は加えられた。
- (14) 本間ますみ氏執筆、日本図書館協会、二〇〇六年。
- (15) 『学校図書館』六六七、二〇〇六年五月。
- (16) 『米国ヤングアダルト図書視察レポート―一九八八年八月―』(ヤングアダルト出版会、一九八九年) 所収。
- (17) 『ヤングアダルトサービス入門』(教育史料出版会、一九九九年)、初出は『図書館界』三十一(一九七九年五月)。
- (18) 『出版年鑑二〇〇六』統計・資料編(二〇〇六年)に拠る。
- (19) 『出版年鑑二〇〇二』(二〇〇二年)『出版年鑑二〇〇三』(二〇〇三年)『出版年鑑二〇〇四』(二〇〇四年)『出版年鑑二〇〇五』(二〇〇五年)『出版年鑑二〇〇六』のそれぞれ目録・索引編に拠り作成した。「小中」は小学生と中学生を対象とするもの、中は中学生、中高は中学生と高校生を対象とするものを示している。その他には、小学生あるいは幼児を対象とするものを入れた。
- (20) 例えば、『BOOK PAGE本の年鑑』(年刊、日外アソシエーツ)の場合は、「絵本・児童書」(高校生までを対象としている)の区分において、「事典・年鑑・図鑑」「社会・生活の本」といった区分けが成されていて、『出版年鑑』の児童書の区分とはまた異なっている。
- (21) 「第一三三回選定図書」は、『学校図書館速報版』一七二六(二〇〇六年九月)一七二七(同)に連載されている。出版年は、すべて二〇〇六年である。
- (22) 「まがいもの」ではないノンフィクションを」(前掲『学校図書館』六六七)。

<note> *A study of reference books for Young-Adult

**Katsumi Misawa (General Education)

キーワード ヤングアダルト 参考図書 学校図書館